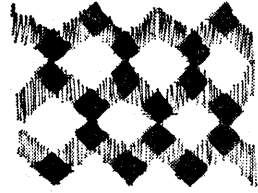


捨てる

捨 う

橋爪千恵子



「捨てる」というテーマをいただいて、まず頭に浮かんだのは「ごみ」。我ながら、「何て夢がないんでしょう」と思い、辞典を引いてみた。しかし、そこにも①不用のものとして投げ出す、(例)ごみを捨てる、と一番初めに書かれている。そこで、「ごみ」を媒介にして、「捨てる・捨う」を考えてみることにした。

私は昨年の秋、静岡県の実業婦人海外派遣団の一員として欧米を約三週間程、視察する機会に恵まれた。五か

国を三週間で回るといふ強行スケジュールであったが、西ドイツとアメリカで家庭滞在があり、ほんの数日にもかかわらずそれは視察の中で最も有意義な日々であった。又、物を「捨てる」という事について大いに考えさせられることがいくつかあった。

まず、西ドイツではこんなことがあった。ある朝、ホスト家庭の奥様が新聞を指さして私に説明してくれたことは——西ドイツでは各家庭で不用になった家具や調度品は、決して捨てない、そういう物を引き取る機関があるので、そこに連絡するとトラックで取りに来る。集まった家具類は一覧表にしてこのように新聞に載せる。そういう物が必要としている人々は非常に安く買うことができる。そしてその利益は福祉施設に寄付する——ざっと、このような内容であった。その話を聞きながら、私は日本の粗大ごみの山を思い浮かべていた。まだ見えそな電気製品や家具などが無残に捨てられている光景を。と、同時にそのごみの山の中から何か掘り出し物を拾おうとしている別の人の姿も。

一方、アメリカでは「ガレージ・セール」を体験した。これは、家庭で不用になった家具や衣類・食器などを各家庭のガレージや庭先などに並べて安い値段で販売する方法である。私達なら捨ててしまおうと思われ

る粗末な物から、立派な家具類までが並んでいた。売り手も立派な家に住んでいる人、買手も中流階級の人が多いと聞いた。世界に比類のない豊かな物質生活を送っているアメリカ人の生活の中で、三十年も前からこのような習慣が生まれ広く人々の中に定着してきたということは、消費万能と思われがちなアメリカ人の知られざる堅実性・合理性を示すものとして注目に値する。このセールでは売り手は不用品を本当に安く値を付け（例えば、五十セントのTシャツ）、買手は、いくら安くともきちんと代金を支払って堂々と自分のものとなり双方にとって都合がよく同時に再び物が生きる訳だ。いつか日本では、長いこと放置されていたさびついた自転車を拾ってきて修理して乗っていた人が、泥棒扱いされたことが話題になったが、そんなことはこのアメリカでは決

して起らないだろう。事実、「果たして乗れるのかしら」と首をかしげたくなる程のボロ自転車価値と共に車庫の隅に置かれていた。

ところで、ある時我が家の二人の子どもが「お母さん、燃えないごみの中からこんないい物を拾ってきたよ。どこも壊れていないのにねえ」と言って、ラジコンのレーシングカーを手に帰って来たことがあった。おそらくラジコン操作がうまくいかなくなつて捨てられた物だろうが、二男が電池を入れたら動き出し、うちの子ども達は喜々として使っている。まだ新しくどこもいたんでない鳥かごが捨てられているのを見て、そのまま収集の中に放り込まれるのが忍びなく拾ったこともある。粗大ごみの収集日は私には辛い日だ。直せば使えるような電気製品がバリバリと音をたてて壊される度に痛みを覚える。それよりも、そういう光景を幾度となく見ている子ども達への影響を考えるととても恐ろしい。

一般にマスコミを通じて私達の目に映る欧米は、優雅であるが、一歩足を踏み込んでみると、外国人を数日間

滞在させてくれる程の家庭でさえ、非常に質素で堅実な生活と営んでいることがわかる。ほんの三日間の滞在中ですら、その堅実ぶりに「なるほど」と感心することがいくつあつたのだから、一年、二年となればその差は大である。生まれた時から、こういう両親の姿を見て育つ欧米の子ども達と、あの粗大ごみの山を生んでいる日本の親を見て育つ子ども達とを比べた時、その差に愕然とするのは、決して私ひとりではあるまい。近頃は「もつたない」という言葉を耳にすることが少なくなつたように思う。子どもは勿論、大人もあまり使わなくなつたのではないだろうか。むしろ「今どき古くさい」という感覚の方が強いかもしれない。しかし「消費は美德」といつていた時代は終わり、そのつけが社会にも教育の中にもはつきりと現われている今日、私は自分が欧米で体験したことをより多くの人に知ってもらいたいと思う。そして何かと捨てようとしている人に「ちょっと待って」と声を掛け、「捨てること」が及ぼす影響の大きさについて、もう一度考えてもらいたいと思うのである。

私の場合の

「捨てる」とは

赤羽美代子



私は、昨夏、東トルコへ旅をしました。

20日間の旅を無事に終えて、帰国の途に着く時、私の頭の中に「真実と、捨てるは、互いに向き合っている」と云う思いが、ごく自然に、頭の中でふくらみ始めました。

連日、40度近くの猛暑の旅でしたが、一日一日が織りなす生活は、私を夢中にさせました。古い遺跡については、云う迄ありませんが、東トルコの子どもたち、お